

「伝える日本語」から「訳せる日本語」へと 言い換える

— 『日本人のための日本語マニュアル（暫定第1版）』 —

Rephrasing "clear Japanese" into "translatable Japanese"
—A manual for writing Japanese for translation (First provisional edition) —



東京工科大学名誉教授 **横井 俊夫**

1966年に電気試験所（現在：産業技術総合研究所）。1982年より第五世代コンピュータプロジェクトを推進。1987年より電子化辞書プロジェクトを推進、運営。1995年よりフィリピン国 ODA プロジェクトを推進、指導。1997年より東京工科大学。2008年より Japio 特許情報研究所顧問。東京工科大学名誉教授、工学博士。
追記：執筆直後の2016年9月に急逝されました（肩書は執筆当時のもの）。謹んで哀悼の意を表します。

東京外国語大学教授 **佐野 洋**

東京外国語大学総合国際学研究院教授（情報工学）。日本語研究や英語教材に関して著作多数。

✉ sano@tufs.ac.jp

東京外国語大学オープンアカデミー講師／翻訳家、語学教材作家 **猪野 真理枝**

東京外国語大学オープンアカデミー講師。英語教育・教材に関する著書多数。

1 「訳せる日本語」

1.1 「訳せる日本語」の位置づけ

本稿では、「日本語マニュアルの会」サイト (<http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>) に掲載済みの「日本人のための日本語マニュアル(暫定第1版^{[1])}」の4章「翻訳依頼原稿を英語に直訳できる『訳せる日本語』に言い換えるステップ」に焦点をあてて説明する。ただし、本来の「訳せる日本語」は、多言語に普遍的に直訳できるものを目指しており、以下では、諸外国語を一括して「X語」という表現を用いる。以降は、英語を例に説明していく。

[1]の1章では、筆者らが考える文章ライティングモデルプロセスを示した(14頁)。このモデルプロセス図の中から、対象言語をX語とした場合の「訳せる日本語」に関わる部分を取り出したものが図1である。

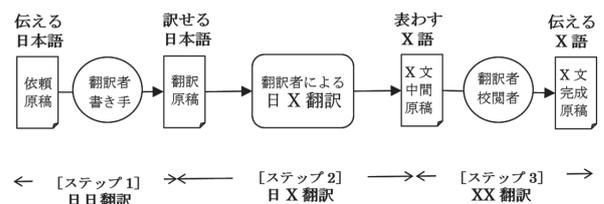


図1 日X翻訳のモデルプロセス「伝える日本語」から「伝えるX語」まで

このモデルプロセスでは、通常はひとつのステップとして扱われる日X翻訳の作業を3つのステップに切り分けている。それでは、図の意味を説明していこう。
ステップ1：「伝える日本語」を「訳せる日本語」へ言い換える（日-日翻訳）

「伝える日本語」で書かれた原稿が依頼原稿として翻訳者に渡される。翻訳者は、依頼原稿に言い換えルールを適用して、「訳せる日本語」で書かれた日X翻訳原稿を完成させる。

言い換えルールとは、X語にはない日本語特有の表現形式や、X語では好まれない日本語の表現形式をX語

に直訳できるように言い換えることである。

ステップ2: 「訳せる日本語」を「表わすX語」へ翻訳する(日-X翻訳)

翻訳者は、「訳せる日本語」で書かれた原稿に対訳ルールを適用して直訳し、「表わすX語」の翻訳原稿を完成させる。「表わすX語」の段階では、X語ネイティブスピーカーにとって、意味は十分に読み取れるものの、座りの悪いX語表現が含まれる。

対訳ルールとは、要素レベルの対訳ルール・構文構造の変換などに関わる共通性の高い構造レベルの対訳ルールのこと、日X対訳辞書にまとめられるものである。

要素レベルの対訳ルールには、単語どうしの対訳ルール・連語どうしの対訳ルール・定型的な句や文どうしの対訳ルールが含まれる。

構造レベルの対訳ルールには、事柄を表現する際のモノやコトの表現の並び方の違い・モノのコトへの係わり方の表現方法の違い・コトの属性(アスペクト、テンス、ムード)の表現方法の違い・モノを修飾する表現方法の違い・コトを修飾する方法の違いなどを埋める対訳ルールが含まれる。

ステップ3: 「表わすX語」を「伝えるX語」へ言い換える(XX翻訳)

翻訳者は、「表わすX語」で書かれた翻訳原稿に「伝えるX語」の言い換えルールを適用して「表わすX語」で書かれたXX翻訳原稿を完成させる。

言い換えルールとは、X語として表現の多義性に違和感があるものや、メタファー的な表現に不自然さがあるもの、文の要素や成分の意味や関係性の読み取りが困難なものを自然になるように言い換えることである。

上記のモデルプロセスの「X語」を「英語」に入れ替えると、「伝える日本語」から「伝える英語」までのモデルプロセスが得られる。図1の「X語」を「英語」に言い換えると以下の図2となる。

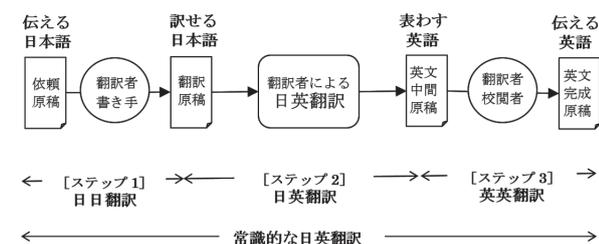


図2 日英翻訳のモデルプロセスー「伝える日本語」から「伝える英語」まで

1.2 「訳せる日本語」の特長

翻訳家が担当する一般的な翻訳プロセス、例えば日英翻訳は、「伝える日本語」から「伝える英語」にするまでのステップがひとくくりになっている。このステップを3つのステップに切り分けて、「訳せる日本語」で書かれた日英翻訳原稿を作る利点を以下に3つ挙げる。

(1) 多言語翻訳へ対応できる

「訳せる日本語」で書かれた日英翻訳原稿が多言語翻訳に確実に直訳が可能になれば、翻訳原稿の価値は上がり、コストに見合うことになる。

(2) 翻訳会社の実業務へ対応できる

翻訳会社の翻訳プロセスは、多くの場合、実態として図2に示された3つのステップを区別することなく踏んでいる。「訳せる日本語」で書かれた翻訳原稿があれば、翻訳の分業体制を明確にし、翻訳発注側と翻訳会社とのコミュニケーションを円滑にできる。

(3) 機械翻訳活用へ対応できる

現在の機械翻訳システムを活用する際に、日英翻訳を前編集作業に対応付け、後編集作業を英英翻訳に対応付けることによって、手順だった精度の高い作業にすることができ。ただし、「訳せる日本語」による翻訳原稿は、人である翻訳者のためのものである。コンピュータによる機械翻訳システムは、長文になると構文処理の精度が急速に低下するだけでなく、意味処理も貧弱、文脈処理はほぼ皆無の状態であり、もうひとつ仕組みが必要である。これには、「訳せる日本語」を、さらに「機械が訳せる日本語」へ言い換える仕組みが用意される。これによって、市販の機械翻訳システムを活用する新しい手段を得ることができるようになる。

2 「訳せる日本語」への言い換えルール

2.1 言い換えルール

「訳せる日本語(英語対応版)」への言い換えルールの最上位ルールは、以下となる。

(訳せる日本語) 英語へ直訳: 「伝える日本語」の文章を英語に直訳できる「訳せる日本語」の文章へ言い換える。

この最上位ルールの詳細化を進めるために、“直訳する”とは何を指すのかを次のように定義する。

(1) 文より上位の表現単位、すなわち、段(パラグラフ)

レベルや連文レベルについては、英語においてもそのままの構成を保つ。ただし、一部の結束性表現に関しては、語レベルで日英の表現特性の違いを埋める必要があるので、「訳せる日本語」の言い換えルールを適用する。

(2) 文レベルに関しては、文という表現単位そのものは、英語においてもそのまま保つ。文の表現形式については、大きく2つの場合に分ける。ひとつは、日本語の表現形式に直接対応する形式を英語も持つ場合である。もうひとつは、日本語の表現形式に直接対応する形式を英語が持たない場合である。前者の場合は、英語もそのままの形を保つ。後者の場合は、「訳せる日本語」の言い換えルールを適用する。

(3) 語レベルに関しては、すべて対訳辞書によって対応づける。対訳辞書には、単一の語だけではなく、連語、複合語、慣用句なども含まれるとする。また、テンス、アスペクト、ムードに関する表現の違いも、対訳辞書の形式にまとめることができるとする。訳語選択（多義解消）に関しては、標準的な翻訳者の推論能力を仮定する。日英の語レベル全体にわたる表現形式の違い、例えば、数の明示化が義務付けられるか否かの違い、同定性（定/不定）の明示化が義務付けられるか否かの違いなどは、「訳せる日本語」の言い換えルールを適用する。語の表現特性の違いに関しては、「訳せる日本語」の言い換えルールを適用する。

以上の直訳の定義に従って、最上位ルールを次の3つの下位ルールへと詳細化する。

（訳せる日本語 - 1）語の表現形式：日本語と英語の間での語レベルの表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように注記を言い添える。

（訳せる日本語 - 2）語の表現特性：日本語と英語の間での語レベルの表現特性の違いを埋め、英語に直訳できるように言い換える。

（訳せる日本語 - 3）文の表現形式：日本語と英語の間での文レベルの表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように言い換える。

2.2 語レベル

（訳せる日本語 - 1）語の表現形式：日本語と英語の間での語レベルの表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように注記を言い添える。

ここで言う「注記を言い添える」とは、日本語を直訳できるように言い換えると非常に不自然な表現になる場合に、「注記」として「言い添える」手段のことを指す。

例えば、「昨日、私は本を買った。」という文を正確に翻訳するためには、「本」が単数か複数か、定冠詞か不定冠詞のどちらを要するのかを判断しなければならない。文脈から正確に判断できない場合は、「複数の本」などと言い換えるか、「本」に注記を言い添える。いずれを選ぶかは、翻訳者の選択である。

第1版では、暫定的に、対象となる〈表現要素〉に対し、小文字で〈注記〉を言い添えることとする。〈表現要素〉の範囲を明示するために下線を用いることもできる。なお、〈注記〉が複数となる場合は、「・(中点)」で区切る。

▶ 「昨日、私は本_定・_{複数}を買った。」

（訳せる日本語 - 1 - 1）数の表現形式：語（可算名詞）の数に関する表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように数に関する注記を言い添える。

日本語の名詞を英語の可算名詞に対応付けて直訳できるようにするためには、次のいずれかの処置を行う。

(1) 文脈や共通常識から数を確定できる場合は、変更は加えない。

▶ 「昨日、私は本を買った。今朝、そのうちの2冊を友人に送った。」

⇨¹“I bought books yesterday. I sent two of them to my friend this morning.”

(2) 文脈や共通常識から数が確定できない場合には、数に関する注記を言い添える。

▶ 「昨日、私は本を買った。今朝、本を友人に送った。」

→「昨日、私は本_単を買った。今朝、本を友人に送った。」

⇨ “I bought a book yesterday. I sent it to my friend this morning.”

（訳せる日本語 - 1 - 2）同定性の表現形式：語（名詞）の同定性に関する表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように同定性に関する注記を言い添える。

英語には、語（名詞）が表現するモノを読み手が同定可能（identifiable）かどうかを明記する冠詞という表

1 ⇨は、翻訳結果を表す。→は、言い換え後を表す。

現形式がある。日本語の語（名詞）を直訳できるようにするためには、次のいずれかの処置を行う。

(1) 文脈や常識から読み手が同定可能であると判断できる場合は、変更は加えない。

▶ 「昨日、私はベストセラー本を買った。」

⇨ “I bought the best-selling book yesterday.”

(2) 文脈や常識から判断できない場合には、同定性に関する注記を言い添える。

▶ 「昨日、私は本を買った。」→「昨日、私は本定・
単を買った。」

⇨ “I bought the book yesterday.”

(訳せる日本語 - 2) の表現特性：日本語と英語の間での語レベルの表現特性の違いを埋め、英語に直訳できるように言い換える。

(訳せる日本語 - 2 - 1) 意味の表現特性：日本語と英語の間での語レベルの表現特性の違い、すなわち、日本語の語は機能面の意味をより大きく内包するという表現特性の違いを埋め、英語に直訳できるように言い替える。

日本語の語は、英語の語に比べ、より機能面の意味を含む。例えば、「外国語は難しい。」という文は、英語に直訳すると“A foreign language is difficult.”となり、文として不適切である。日本語の「外国語」という語には、それに関わる機能面の意味である「外国語を習得すること」、「外国語を話すこと」などが含まれるが、英語の“language”には、そのような意味を含むことができないからである。したがって、「外国語は難しい。」を直訳できるようにするためには、例えば、以下のように言い換える。

▶ 「外国語は難しい。」→「外国語を習得するのは難しい。」

⇨ “It is difficult to master a foreign language.”

(訳せる日本語 - 2 - 2) 数による表現特性：数に関する表現形式の違いから生じる日本語と英語の間での語レベルの表現特性の違いを埋めるために、英語に直訳できるように言い替える。

「言語」という語と、“language”という語の平均的な辞書記述を比べてみよう。

[国語辞書] 言語：

①音声や文字によって、人の意志・思想・感情などの情報を表現・伝達する、または受け入れ、理解するための約束・規則。また、その記号の体系。音声を媒介とするものを音声言語（話し言葉）、文字を媒介とするものを文字言語（書き言葉）、コンピュータなど機械を媒介とするものを機械言語・アセンブリ言語などという。

[英和辞書（英英辞書）] LANGUAGE：

①（一般に）言語、言語能力。（非可算）
②特定の国や地域で話したり書いたりするのに用いられる個別の言語。（可算）
③意思や感情の伝達手段、表現・伝達のための記号体系。（可算・非可算）

日本語の「言語」は、単義的に捉えられている。一方、英語の“language”は、多義的に捉えられている。その多義は、可算・非可算という表現形式の違いにも対応付けられている。日本語の「言語」を単純に“language”へと直訳しただけでは、翻訳したとは言えないのは明白である。

次の例文における「言語」は、一般的な言語（語義①）という解釈と個別の言語（語義②）という解釈があり得る。英語は、どちらの意味かによって、“language”の表現形式が異なる。

▶ 「私たちは、言語を、コミュニケーションの手段として用いる。」

これを直訳できるようにするためには、次のように注記を言い添える。

▶ →「私たちは、言語非可算を、コミュニケーションの手段として用いる。」

⇨ “We use language as a means of communication.”

もちろん、文脈から可算・非可算の区別が判断できる場合には、注記を言い添える必要はない。

(訳せる日本語 - 2 - 3) 同定性による表現特性：同定性に関する表現形式の違いから生じる日本語と英語の間での語レベルの表現特性の違いを埋めるために、英語に直訳できるように言い換える。

(訳せる日本語 - 1 - 2) で指摘したように、日本語と英語では、語(名詞)の同定性に関する表現形式が異なる。



この表現形式の異なりは、日英間の語に同定性に関わる表現特性の違いを生じさせる。次の例文を見てほしい。

- ▶ 「昨日、私は自動車①を買った。自分の年齢を考慮すると、自動車②を運転することはやめるべきかもしれない。」

まず、「自動車①」は、数によって“a car”か“cars”、そして読み手が同定可能か否かによって“the car”か“the cars”の可能性が考えられる。

次に、「自動車②」は、「自動車①」と同一物の場合もあり得るが、「自動車①」を含む自動車全般を指すという解釈もあり得る。

したがって、「自動車②」を直訳できるようにするためには、同一物なら「その自動車」、他の自動車も含むなら、「その自動車とその他の自動車」に区別して言い換える。

- ▶ → 「昨日、私は自動車を買った。自分の年齢を考慮すると、その自動車を運転することはやめるべきかもしれない。」

⇔ “I bought a car yesterday. If my age is taken into consideration, I had better stop driving the car.”

- ▶ → 「昨日、私は自動車を買った。自分の年齢を考慮すると、その自動車とその他の自動車を運転することはやめるべきかもしれない。」

⇔ “I bought a car yesterday. If my age is taken into consideration, I had better stop driving the car and other cars.”

2.3 文レベル

（訳せる日本語 - 3）文の表現形式：日本語と英語の間での文レベルの表現形式の違いを埋め、英語に直訳できるように言い換える。

（訳せる日本語 - 3 - 1）主語なし文：主語のない文を英語に対応づけできる文に言い換える。

主語なし文とは、ガ格の成分がない文、あるいは、ガ格となりうる成分がない文である。主語に関する日本語特有の表現形式には、主語なし文の他に、二重主語文と擬似主語文がある。二重主語文については、（訳せる日本語 - 3 - 3）を、擬似主語文については、（訳せる日本

語 - 3 - 4）を参照されたい。

日本語で、事柄を主語なし文として表現するのは、大きく次の2つの場合である。

（1）文脈から主語を容易に確定できる場合

主語だけではなく、文脈から容易に確定できる格成分は、原則として、表現しない。

（2）主語が情報として重要でない場合

主語がごく常識的な動作主に対応する場合は、表現しない。これは、（1）の特別な場合だと見做すこともできる。

主語なし文の言い換えルールは、次の3つに詳細化される。

- （その1）主語を補足する。
- （その2）受動態に言い換える。
- （その3）命令文に言い換える。

（その1）：文脈から適切な主語（主格）成分を補足し、主語あり文に言い換える。

次の例文を見てほしい。ガ格成分は、「求められる」の主語であり、「置くべきである」のガ格成分はないので、主語なし文である。

- ▶ 「第1に、外国語を使うことが強く求められる環境に身を置くべきである。」

文脈から適切な主語、例えば「日本人」を読み取り、補足する。ここでは、格助詞「が」を「は」で取り立てる表現にする。

- ▶ → 「第1に、日本人は、外国語を使うことが強く求められる環境に身を置くべきである。」

この例文には、「外国語を使うこと」という主語なし従属節が含まれている。日本語マニュアル（暫定第1版^[1]）においては、「従属節の主語は、主節主語と異なる場合にのみ補足する」というサブルールを設けるにとどめる。

（その2）：目的語（対格）成分を主語成分とする受動態文に言い換える。

文脈上、主語が情報として伝える価値がない場合、省略されている文がある。

- ▶ 「本工程では、複数の新機能部品を接続部材で電氣的に接続する。」

この主語なし文に主語を補足すると、以下のような主語あり文になる。

- ▶ 「本工程では、作業者が複数の新機能部品を接続部材で電氣的に接続する。」

しかし、工程の説明に「作業者」という主語を明示しても、情報として伝える価値がない。このようなタイプの主語なし文は、次のように、行為の対象（目的語）を主語にして、受動態に言い換える。

- ▶ → 「本工程では、複数の新機能部品が接続部材で電氣的に接続される。」

（その3）：命令文に言い換える。

作業手順や指示を表す文では、行為者が情報として重要ではないため、主語なし文で表現される。

- ▶ 「作業ラインの状態を確認し、作業を開始する。警報ランプが点灯した時は、ただちに作業を中断する。作業ラインの状態を点検する。作業ライン上の異物を取り除く。安全を確認したら、作業を再開する。」

この文章は、5つの主語なし文から構成される。主語を補うとすれば、この作業手順を読む「作業者」や、読み手を指す「あなた」などである。しかし、英語では、手順や指示は命令形で表現されるので、命令文に言い換える。

- ▶ → 「作業ラインの状態を確認し、作業を開始しなさい。警報ランプが点灯した時は、ただちに作業を中断しなさい。作業ラインの状態を点検しなさい。作業ライン上の異物を取り除きなさい。安全を確認したら、作業を再開しなさい。」

（訳せる日本語 - 3 - 2）目的語なし文：文脈から適切な目的語（対格）成分を補足し、目的語あり文に言い換える。

「目的語なし文」とは、目的語のない文である。日本語の目的語は、格助詞ワ格によって表示される、述語の対象となる成分である。日本語では、文脈から容易に確定できる場合には省略する。以下の例文では、目的語も主語も省略されている。

- ▶ 「新しいパスワードをメールで受け取って下さい。画面上の空欄に自分のメールアドレスを入力して、受信して下さい。」

省かれた目的語は、以下のように補って言い換える。

- ▶ → 「新しいパスワードをメールで受け取って下さい。画面上の空欄に自分のメールアドレスを入力して、パスワードを受信して下さい。」

（訳せる日本語 - 3 - 3）二重主語文：二重主語文を、主語ひとつ文に言い換える。

「二重主語文」とは、2つの主語をもつ文である。この文は、「<主語1>が<主語2>が<述語>。」という形式をとる。多くの場合、<主語1>の「が」は、「は」によって取り立てられ「<主語1>は<主語2>が<述語>。」の形になる。

英語の主語は、常にひとつなので、二重主語文は主語ひとつ文に言い換える。言い換えルールを整理するにあたり、二重主語文は、大きく第1種二重主語文と第2種二重主語文に分ける。

[第1種二重主語文]

事柄の認識において、着目点とモノが分かれて、2つの主語として表現されたのが第1種二重主語文である。次の例のように、<主語1>が着目点、<主語2>がモノである。

- ▶ 「私は水が飲みたい。」
- ▶ 「孫はピアノがうまい。」
- ▶ 「この装置の取扱方法は人に説明するのが難しい。」

[第2種二重主語文]

事柄の認識において、<主語1>の一部ないし一面である<主語2>のあり方を語ることによって<主語1>自身のあり方を語る>のが第2種二重主語文である。次の例のように、<主語1>と<主語2>の間に、「<主語1>の<主語2>」という関係が成り立つ。

- ▶ 「象は鼻が長い。」（「象の鼻」）
- ▶ 「初夏の川岸は緑が美しい。」（「初夏の川岸の緑」）
- ▶ 「その金属は表面が鏡面のようだ。」（「その金属の表面」）

二重主語文の言い換えルールは、次のよう詳細化される。

- （その1）ひとつを主語とし、もうひとつを目的語とする他動詞文にする。
- （その2）ひとつをトピックス化し、もうひとつを主語とする文にする。
- （その3）ひとつを主語とし、もうひとつを主語に対する修飾句とする文にする。

なお、第1種二重主語文は、（訳せる日本語 - 3 - 4）擬似主語文でも取り上げる。



(その1)：二重主語の内のひとつを主語とし、もうひとつを目的語とした文に言い換える。

第1種二重主語文では、「<主語1>は<主語2>が<述語>。」の着目点<主語1>を主語とし、モノ<主語2>を目的語とする文に言い換える。

- ▶ 「私は水が飲みたい。」→「私は水を飲みたい。」
- ▶ 「妻は中国語が話せる。」→「妻は中国語を話せる。」

第2種二重主語文では、「<主語1>は<主語2>が<形容詞>。」を「<主語1>は<形容詞><主語2>を<述語>。」と言い換える。<述語>には、「もつ」「有する」「備える」「している」などを使う。

- ▶ 「象は鼻が長い。」→「象は長い鼻をもつ。」
- ▶ 「初夏の川岸は緑が美しい。」→「初夏の川岸は美しい緑をしている。」

この言い換えは、日本語としては、少々不自然な言い換えとなる。これについては、(訳せる日本語-3-10) 主題優勢文で触れる。

(その2)：二重主語の内のひとつをトピックス化し、もうひとつを主語とした文に言い換える。

第1種二重主語文では、「<主語1>は<主語2>が<形容詞>。」の着目点<主語1>をトピックス化し、モノ<主語2>を主語とする文に言い換える。

- ▶ 「孫はピアノがうまい。」
→「孫に関しては、ピアノがうまい。」
- ▶ 「この装置の取扱方法は人に説明するのが難しい。」→「この装置の取扱方法に関しては、人に説明するのが難しい。」

第2種二重主語文では、「<主語1>は<主語2>が<形容詞>。」の<主語1>をトピックス化し、「その<主語2>が<形容詞>。」と続ける。

- ▶ 「象は鼻が長い。」→「象については、その鼻が長い。」
- ▶ 「初夏の川岸は緑が美しい。」→「初夏の川岸に関しては、その緑が美しい。」

(その3)：二重主語の内のひとつを主語とし、もうひとつを主語に対する修飾句とした文に言い換える。

第2種二重主語文「<主語1>は<主語2>が<形容詞>。」を「<主語1>の<主語2>が<形容詞>。」と言い換える。

- ▶ 「象は鼻が長い。」→「象の鼻が長い。」

- ▶ 「初夏の川岸は緑が美しい。」→「初夏の川岸の緑が美しい。」

(訳せる日本語-3-4) 擬似主語文：擬似的な主語をもつ疑似主語文を、真正な主語をもつ文に言い換える。

「擬似主語文」とは、ガ格で表示される成分が動作や状態の主体を表さない文、またはガ格以外によって動作や状態の主体が表されている文である。主語と思われるものが擬似的であり、これを直訳できるようにするには、英語に対応する主語を持つ文に言い換える。

言い換えルールを整理するにあたり、擬似主語文は、次のような3つのタイプに分ける。

[二格主語文]

日本語の主語は、ガ格で表示されるが、「できる、分かる、見える、ある、いる」などの能力や知覚を表す述語の主体を表す場合には、二格主語が使われる。「私に富士山が見えた。」のように「<主語>に<対象>が<述語>」の形で用いられる。この場合、ガ格は目的語を表す。

[<他動詞+てある>文]

「コップが置いてある。」のように、他動詞「置く」に「てある」を付けることによって自動詞のように使う表現である。ガ格で表示される「コップ」は、「置く」の目的語であり、「置く」の主語ではない。

[主語なし二重主語文]

二重主語文((訳せる日本語-3-3) 参照)の「<主語1>が<主語2>が<述語>」において、<主語1>が省かれて「<主語2>が<述語>」として使用される場合がある。第1種二重主語文に多くみられる。「水が飲みたい。」「中国語が話せる。」「ピアノがうまい。」のガ格成分は、<述語>の目的語である。

擬似主語文の言い換えルールは、次の3つに詳細化される。

- (その1) 二格主語文を、ガ格主語文に言い換える。
- (その2) <他動詞+てある>文を他動詞文か受動態文か自動詞文に言い換える。
- (その3) 主語なし二重主語文に主語を補い、本来の二重主語文に言い換え、(訳せる日本語-3-3)を適用する。

(その1)：二格主語文を、ガ格主語文に言い換える。

二格主語文「<主語>に<対象>が<述語>」の「に」は、しばしば取り立てられて「には」と表現される。さらに、「には」が縮退し、単に「は」となるときもある。

- ▶ 「その提案に問題がある。」
- ▶ 「その提案には問題がある。」
- ▶ 「その提案は問題がある。」

このような二格主語文は、ガ格主語文に言い換える。すなわち、「<主語>に<対象>が<述語 1>」を「<主語>が<対象>を<述語 2>」に言い換える。その際、目的語<対象>はヲ格に変え、それに合わせて<述語>も少し変える場合がある。

- ▶ 「その提案に問題がある。」→「その提案が問題を含む。」
- ▶ 「あの経営者に時代の変化が理解できていない。」→「あの経営者が時代の変化を理解できていない。」

(その2) : <他動詞+てある>文を他動詞文か受動態文か自動詞文に言い換える。

<他動詞+てある>文は、の<他動詞>には、モノの位置や状態を変化させる動詞が広く含まれる。また、<他動詞>には、自他の対応を持つものと持たないものに分かれる。ガ格が表すのは、本来は<他動詞>の目的語になる<対象>である。

<他動詞>が自他の対応を持つ場合は、次の3つに言い換える。

(1) 動作主となる主語を補い、<対象>を目的語とする他動詞文に言い換える。

- ▶ 「ドアが開けてある。」→「私がドアを開けた。」

(2) <対象>を主語とする受動態文に言い換える。

- ▶ 「ドアが開けてある。」→「ドアが開けられている。」

(3) <対象>を主語とする自動詞文に言い換える。

- ▶ 「ドアが開けてある。」→「ドアが開いている。」

<他動詞>が自他の対応を持たない場合は、次の2つに言い換える。

(1) 動作主となる主語を補い、<対象>を目的語とする他動詞文に言い換える。

- ▶ 「コップが置いてある。」→「私がコップを置いた。」

(2) <対象>を主語とする受動態文に言い換える。

- ▶ 「コップが置いてある。」→「コップが置かれている。」

(その3) : 主語なし二重主語文に主語を補い、本来の二重主語文に言い換え、(訳せる日本語-3-3)を適用する。

主語なし二重主語文とは、二重主語文「<主語 1>が<主語 2>が<述語>。」において、<主語 1>が省かれて「<主語 2>が<述語>。」として使用された文である。このような二重主語文の多くは、第1種二重主語文である。

主語なし二重主語文は、主語を補い、本来の二重主語文に戻す。そして、(訳せる日本語-3-3)を適用して、主語ひとつ文に言い換える。

- ▶ 「水が飲みたい。」→「ランナーが水が飲みたい。」→「ランナーが水を飲みたい。」
- ▶ 「中国語が話せる。」→「私の友人が中国語が話せる。」→「私の友人が中国語を話せる。」

(訳せる日本語-3-5) 名詞文 : コピュラ文に対応付けられない名詞文を、コピュラ文に対応付けられる名詞文か通常動詞文・形容詞文に言い換える。

「名詞文」とは、名詞を述語とする文である。日本語では、動詞・形容詞・名詞が述語となる。

英語の名詞 be 動詞を用いた文「<名詞 1> <be 動詞> <名詞 2>」は、コピュラ文と呼ばれる。コピュラ文は、「He is a police officer.」のように2つの概念の包含関係や「He is the police officer.」のように2つの概念の同値関係という命題を表現する。2つの概念を繋ぐ繫辞(コピュラ)が be 動詞である。

日本語では「<名詞 1>は / が <名詞 2>だ。」という形の名詞文がコピュラ文に対応する。「彼は警官だ。」という包含関係や「彼がああ警官だ。」という同値関係を表現する。「だ / です」などが日本語の繫辞(コピュラ)である。

しかし、日本語の名詞文がコピュラ文に対応付けられない場合は、次の3つのように言い換える。

(1) コピュラ文に対応付けられる名詞文に言い換える。

(2) 動詞文に言い換える。

(3) 形容詞文に言い換える。

言い換えにあたり、コピュラ文に対応付けられない名詞文のタイプを大きく3つに整理しておく。

[特性値文]

<名詞 2> が、<名詞 1> の特性の値となる名詞文



である。「私の家は中野だ。」は、「私の家の場所は中野だ。」という意味であり、「私の家」の「場所」特性の値が「中野」であると述べている。

[ウナギ文]

<名詞 1> と <名詞 2> の間に明確な関係がなく、文脈に応じて様々に解釈できる名詞文である。「ぼくはウナギだ。」は、文脈に応じて、「僕が注文するのはウナギだ」や、「ぼくが買ったのはウナギだ。」等に解釈される。

[複合述語文]

<名詞 2> が、「<修飾語><名詞 2>」の形で使われてはじめて意味を成す、複合的な名詞述語文である。「彼はまじめな性格だ。」という名詞文を「まじめな」という修飾語を除いて「彼は性格だ。」とすると意味を成さない。

言い換えルールは、以上 3 つの名詞文のタイプごとに、(その 1) から (その 3) まで次のように詳細化される。

(その 1)：特性値文タイプの名詞文をコピュラ文となる名詞文に言い換える。

特性値文「<名詞 1> は <名詞 2> だ。」は、「<名詞 1> の <特性> は <名詞 2> だ。」と特性を明示するように言い換える。

- ▶ 「昨日受け取った書類は、メールボックスだ。」→「昨日受け取った書類の所在場所は、メールボックスだ。」(コピュラ文)
- ▶ 「会議は 3 時だ。」→「会議の開始時刻は、3 時だ。」(コピュラ文)

(その 2)：ウナギ文タイプの名詞文を文脈に応じたコピュラ文となる名詞文に言い換える。

ウナギ文「<名詞 1> は <名詞 2> だ。」は、<名詞 1> に文脈に応じた事柄を補足する。

- ▶ 「ぼくは新製品の企画だ。」→「ぼくが担当するのは新製品の企画だ。」(コピュラ文)
- 「ぼくが希望するのは新製品の企画だ。」(コピュラ文)
- ▶ 「夏はビールだ。」→「夏においしいのはビールだ。」(コピュラ文)
- 「夏に飲みたいのはビールだ。」(コピュラ文)

(その 3)：複合述語文タイプの名詞文をコピュラ文となる名詞文や形容詞文に言い換える。

複合述語文「<名詞 1> は <修飾語><名詞 2> だ。」は、「<名詞 1> の <名詞 2> は <修飾語><名詞 2>。」もしくは「<名詞 1> の <名詞 2> は <修飾語> だ。」と言い換える。

- ▶ 「彼はまじめな性格だ」→「彼の性格はまじめな性格だ。」(コピュラ文)
- 「彼の性格はまじめだ。」(形容詞文)
- ▶ 「そのプレゼンテーションは、物足りない感じだ。」→「そのプレゼンテーションの感じは、物足りない感じだ。」(コピュラ文)
- 「そのプレゼンテーションの感じは、物足りない。」(形容詞文)

(訳せる日本語 - 3 - 6) 複数動詞文：複数の動詞の連鎖（語彙的複合動詞など）を述語とする文をそれぞれの動詞を述語とする文の連鎖に言い換える。

「複数動詞文」とは、述語が <動詞+動詞> という臨時的な動詞の連鎖で構成される文である。例えば「熊を銃で撃ち撃退した。」は、述語が「撃つ」と「撃退する」の 2 つの動詞の連鎖で構成される複数動詞文である。ただし、「光り輝く」のように定型的な連鎖や、「食べてみる」のように後ろの動詞が補助動詞となる連鎖は、複数動詞文には含めない。

日本語では、動詞とその格成分の結びつきがそれほど強くないため、動詞の連鎖を用いた表現形式がよく使われる。しかし、英語では、動詞とその格成分との結びつきが強いため、動詞の連鎖という表現形式の使用は限られる。

複数動詞文を直訳できるようにするには、それぞれの動詞を述語とする文の連鎖、つまり複文に言い換える。その際、2 つの動詞の意味的な関係を明示化するための言い換えも行う。

- ▶ 「猟師が熊を銃で撃ち撃退した。」→「猟師が熊を銃で撃ち、そして、熊を撃退した。」(継起)
- 「猟師が熊を銃で撃つことで、熊を撃退した。」(手段)
- 「猟師が熊を撃退するために、熊を銃で撃った。」(目的)

〔訳せる日本語 - 3 - 7〕数量詞遊離文：数量詞が連体修飾する名詞から遊離し連用修飾する数量詞遊離文を、数量詞が遊離しない形式に言い換える。

「数量詞遊離文」とは、数量詞が連体修飾する名詞から遊離して、述語を連用修飾する文である。例えば、「3人の留学生がパーティに出席した。」の数量詞を遊離させると「留学生が3人パーティに出席した。」となる。「数量詞遊離文」は、数量詞が名詞性と副詞性の二重性を帯びていることから生じる。英語の数量詞は、遊離しないのが基本なので、直訳できるように言い換える。

- ▶ 「会計課から担当者が3人出席した。」
→ 「会計課から3人の担当者が出席した。」
- ▶ 「その観点から、苦手とする外国語を習得するために日本人が心得なければならない要点を3点挙げる。」 → 「その観点から、苦手とする外国語を習得するために日本人が心得なければならない3点の要点を挙げる。」

〔訳せる日本語 - 3 - 8〕間接受身文：間接受身文（迷惑の受身文）を、能動態文に迷惑表現を追加した形式に言い換える。

直接受身文とは、「猫が花壇を荒らした。」という他動詞能動態文の「主語と目的語」を交代させた「花壇が猫に荒らされた。」という形式の文である。「間接受身文」とは、直接受身文ではない受身文のことである。

間接受身文には、例えば「私は雨に降られた。」のように「雨が降る。」という自動詞文を受身にしたものや、「わが社は有能な人材に内定を辞退された。」のように「有能な人材が内定を辞退する。」という他動詞文から作られた受身ではないものが含まれる。間接受身文には、残念な気持ちが含意されるので、迷惑の受身文とも呼ばれる。

英語に対応するのは直接受身文だけなので、間接受身文を直訳できるようにするためには言い換えが必要である。

間接受身文をどのように言い換えるかは、書き手が迷惑の気持ちをどう表現するかという選択になる。迷惑の気持ちを類別して、言い換えた例を挙げておく。

〔困惑・悩み〕

- ▶ 「私は娘に泣かれた。」 → 「私については、娘が泣いた。そのため、私は往生した。」

〔遺憾〕

- ▶ 「わが社は売り上げで他社に抜かれた。」
→ 「わが社については、他社が売り上げで抜いた。そのため、わが社は残念だ。」

〔予想外〕

- ▶ 「私は新しい服のデザインを彼に驚かれた。」
→ 「私については、彼が新しい服のデザインに驚いた。そのため、私は予想外だと思った。」

〔訳せる日本語 - 3 - 9〕省略のある形容詞節：省略のある形容詞節を、省略のない形容詞節に言い換える。

「省略のある形容詞節」とは、修飾部と被修飾名詞が直接結びつかない形容詞節である。例えば「サンマを焼く煙」という形容詞節の修飾部「サンマを焼く」は、被修飾名詞「煙」を文の成分として位置付けることができない。英語には、省略のある形容詞節に直接対応する形式がないので、修飾部を「サンマを焼く時に出る」に言い換える。こうすれば「サンマを焼く時に出る煙」という形容詞節は、「煙がサンマを焼く時にでる」のように「煙」を文の成分とした直接的な結びつきをもつことができるようになる。

- ▶ 「潤滑油が焼ける匂い」
→ 「潤滑油が焼ける時に生じる匂い」

〔訳せる日本語 - 3 - 10〕主題優勢文：主題優勢による伝達構造表現を、主語優勢による伝達構造表現に言い換える。

「主題優勢文」は、伝達構造における既出情報を主題で表現する文である。述べようとする事柄を主題に立てて、それについての解説をする形をとるので、述語には、形容詞や「～である、～になる、～がある」のような状態表現が多くなりがちである。

一方、主語優勢文は、既出情報を主語で表現する文である。主語優勢文では、行為者主語を立て、述語には「～をする」という行為表現が多くなる。

日本語は主題優勢文を好み、英語は主語優勢文を好むので、主題優勢文を直訳すると、英語らしさに欠けることになる。これは、主語優勢文に言い換えると、自然な英語になる。

例えば、「彼女のバックはかわいい。」という主題文は、主題「彼女のバック」を英語の主語にして表現することができるが、行為者主語を立てて、「彼女はかわいいバック



クを持っている」と表現するほうがより英語的になる。

- ▶ 「その店は印象が悪い。」
→ 「私は、その店に悪い印象を持っている。」
- ▶ 「議論の中には、日本語が世界の言語の中でも際立って特殊な言語であり、本来、日本人には外国語は向かないという悲観論を説くものもあった。」
→ 「ある議論は、日本語が世界の言語の中でも際立って特殊な言語であり、本来、日本人には外国語は向かないという悲観論を説いた。」

3 おわりに

本来の「訳せる日本語」は、多言語に普遍的に直訳できるものを目指しており、次版以降の改訂を通じて、英語と言語特性が似ている西欧諸語への拡大、そして次は、中国語に拡大し、多言語に対応できるようにしていく。

また、「訳せる日本語」への言い換え作業は、まずは、マニュアルに基づく人手による言い換え操作によって行われるが、支援システムの機能が充実するにしたがって、システムが言い換えを主導し、人手によるチェックと手直しをインタラクティブに行うという作業形態へと進化していくことを想定している。

注記

“日本人のための日本語マニュアル（暫定第1版）”は、横井俊夫、石崎俊、佐野洋、石黒圭、猪野真理枝、烏日哲（日本語マニュアルの会のメンバー）によって作成されたものである。

参考文献

- [1] 日本語マニュアルの会、“日本人のための日本語マニュアル(暫定第1版),” 278 2016. [オンライン]. Available: <http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>.
- [2] 猪野真理枝 佐野洋 馬場彰監修、英作文なんかこわくない - 日本語の発想でマスターする英文ライティング、東京外国語大学出版会、2011.
- [3] 佐藤武義 前田富祺編集代表、日本語大事典、朝倉書店、2014.
- [4] 日本語文法学会編、日本語文法事典、大修館書店、2014.
- [5] 横井俊夫、“日本人のための日本語マニュアル,” *Japio YEAR BOOK 2014 寄稿集*, pp. 268-273, 2014.
- [6] 横井俊夫他、“日本人のための日本語マニュアル,” *Japio YEAR BOOK 2015 寄稿集*, pp. 346-351, 2015.

5

産業日本語関連